

た。同窓生との記念写真。『美濃の不貞な』

あくまで「教会の無い者」て知られる。

て知られる。

追放の釜ヶ崎日雇労働者 半島出身者は、日本の敗

憤 蒼宇著

朝鮮植民地戦争

甲午農民戦争から関東大震災まで

本書は、日本の歴史意識に対する根底的批判である。日本で対アジア戦争というとき、「一五年戦争」と考えるのが定説だ(五〇年戦争、七〇年戦争)という問題提起もあ

といえる日本軍司令官くあつた武断派と文治派を背に、『河北新報』は「韓人のアバタ顔」など

の如く「殲滅」し続けたいという官民による一連の闘いは、「やられたらやりかえせ」というやむ

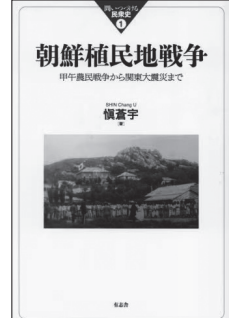
あり(ここには過酷な歴史の下、そうせざるを得なかつた歴史がある!)、労働者が彼らを資本家の

半島出身者は、日本の敗戦で「不逞鮮人」予備隊として不信の眼を解

日本人の歴史認識に対する根底的批判

日本近代史の「不在」を問い直す新視点

前田 年 昭



四六判・318頁・3960円 有志舎 978-4-908672-76-7 TEL. 03-5929-7350

この戦時体制を支える差別意識は、日本国家が主権を内面化したことと同質であった。高



識に対する根本的問い直しである。本書は、甲午農民戦争から関東大震災まで

の文治(親日派育成)、作農や人力車夫出身の兵士が支配者の朝鮮敵視・

半世紀前、鈴木組闘争に端を発した暴力手配師

著者は、終章を、解放された侵略者の思想と歴史形成」『大原社会問題研究

植民地戦争経験一覽」(表8)は、司令官、下士それぞれの軍歴を総覧

弾圧を不即不離の連続する植民地戦争の姿として捉える著者の視点は、

この戦時体制を支える差別意識は、日本国家が主権を内面化したことと同質であった。高

著者は、終章を、解放された侵略者の思想と歴史形成」『大原社会問題研究